

歌からみた残留孤児

放送大学で中国残留孤児について講義をした。その受講者で山形県に住む元小学校教諭、齋藤宏子さんが、残留孤児にインタビューをして卒業論文にまとめ、私に送ってくださいました。

この論文のユニークさは、歌に注目した点にある。

中国に取り残された残留孤児は、日本語、自分や家族の名前をすべて忘れてしまっても、幼い頃に歌った日本の歌を覚えていた。意味はわからなくても、メロディーや歌詞を覚えていたのである。

一人目の残留孤児は、「さくらんぼ兵隊さん、おー、二進む 山形子どもは勇ましい」という子供向けの軍歌が歌えた。一九三三年、東京日日新聞が軍歌を募集した際、山形県の小学生が作詞して一等賞になり、県内の小学校で盛んに歌われた歌である。軍歌だから当然、ナショナルリズムを高揚させるための歌だが、ただ一つその歌が山形県というローカリティ（地域性）に根ざしていたため、この残留孤児の故郷が判明し、肉親と再会できるきっかけとなった。

二人目は、父が歌っていた「蘭の花咲く満州で 男一匹腕試し」という歌を覚えていた。国策だった満州移民を鼓舞する歌だ。移民した父は現地で徴兵され、彼女は残留孤児になった。彼女は今、「こんな歌、歌いたくない」と言いつつ、日本の介護福祉施設でこの歌を口ずさんでいる。それは、こん

な歌には二度とだまされないという彼女の矜持でもある。

三人目は、実母によって中国人養父母に託された。実母は立ち去る前、歌を歌ってくれた。「夜鳴く鳥の悲しさは 親を訪ねて海こえて 月夜の国へ消えてゆく 銀の翼の浜千鳥」。取り残された残留孤児は中国でつらいことがあるたび、この歌を人に隠れてこっそり歌い、生きる力に変えていった。歌は不思議で、強いものである。